

[講演要旨]

西暦 857 年(天安元年)比内地震に伴う崩壊地形(予察)

元秋田県立男鹿工業高校 栗山 知士\*

Form of Landslide to the 857 Hinai Earthquakes, Akita Prefecture, Northeast Japan

Satoshi KURIYAMA

本報告で紹介する比内地震は正史にない地震で、いまだはっきりしていない謎の地震である。したがって、研究者によっては、年表から除外している場合もある。

比内地震について、宇佐美(1996)は、次のような記載をしている“857IV4(天安 1 III3)出羽比内、大館地方の松峰山伝寿院の堂舎ゆり崩れ、山崩れて仏像谷底に埋まる。この地震、正史に見当たらず。”これは、今村(1942・1943)の文献から引用されたものである。

本報告は、比内地震による山崩れ(崩壊)は、どこで発生したのかを、空中写真判読と現地調査をし、若干の考察を試みた。

活断層研究会(1980)は、比内地震の震源地を大館盆地北東の釈迦内東方断層(确实度Ⅲで長さ5.5 kmの活断層)とし、マグニチュードは7.0としている。その後、活断層研究会(1991)は、理科年表に採用されていない関係から比内地震を除外している。また、中田・今泉(2002)は、活断層の定義を再検討して、最近数十万年間に概ね千年から数万年の周期で繰り返し動いてきた跡が地形に現れ、活動も繰り返すと考えられる断層と定義づけた関係から、釈迦内東方断層を除外している。

菅江真澄の紀行文である「贅の柵(贅能辞賀楽美)」(大館地方の巡遊紀行)松峰紀行の箇所では比内地震を記載している。真澄はこれが天安元年の地震によるものであると論じた(今村, 1942)。また、今村は(1943ab)、大館盆地の引欠川沿いの大披、鷹巣盆地の小猿部川沿いの小ヶ田の各埋没家屋の原因を菅江真澄の紀行文から地震によるものと考察している。しかし、平山・市川(1966)は、1,000年前の十和田火山の噴火によるシラス洪水(ラハール)であるとした。

松峰紀行の箇所に記載されている天安元年の比

内地震は、伝寿院の舊紀が基になっているようであるが、舊紀は保存されていないそうである(今村, 1942)。

大山(標高 375m)の東側斜面は、新鮮で開析されていない滑落崖がみられ、移動ブロックも明瞭である。大山を連なる南北方向に走る稜線の東側斜面も大山同様滑落崖の地形を示している。

大山の滑落崖の比高は約 100m で、地質は新第三系中新統大滝層のデイサイトである。全般に暗灰色～灰白色を呈する緻密質岩石で流理構造がみられ、柱状節理が発達している(井上ほか, 1973)。

大山の東山麓の段丘化した小扇状地状の地形には、松峰遺跡(集落跡、遺構・遺物は土師期、須恵期、中世陶器が発見されている)と不動池付近の大山板碑遺跡(板碑、遺構・遺物は碑文(種子)“オン、年号なし)が確認されている(秋田県教育委員会, 1991)。これらの遺跡が発掘された場合、大山の山崩れに関しての資料が提供される可能性がある。

文献

秋田県教育委員会(1991):『秋田県遺跡地図(県北版)。今村明恒(1942):地震, 10, 254-260。今村明恒(1943a):地震, 114-119。今村明恒(1943b):帝国学士院記事, 2, 329-325。平山次郎・市川賢一(1966):地質ニュース, 140, 10-28。井上 武ほか(1973):秋田県総合地質図幅(5 万分の 1)説明書「大館」。秋田県。活断層研究会(1980):『日本の活断層一分布図と資料一』。東京大学出版会。活断層研究会(1991):『新編日本の活断層一分布図と資料一』。東京大学出版会。松峰郷土史編集委員会(1997):『松峰郷土史』。松峰町内会。宇佐見龍夫(1996):『新編日本被害地震総覧[増補改訂版 416-1995]』。東京大学出版会, 493p。内田武志・宮本常一(1972):『菅江真澄全集 第三巻』。未来社。

\* 〒018-01745 秋田県南秋田郡五城目町川崎字宮花 10-47  
電子メール:kurichan-79@minos.ocn.ne.jp